

礼拝 2023年9月17日(日)

題 『永遠の命を得る』

テキスト：ヨハネによる福音書3章16～17節

皆さま、おはようございます。

本日は秋季永眠者記念礼拝を皆様と共に捧げることのできますことを神様に感謝いたしております。皆様、この記念礼拝にお越しくださり心から感謝申し上げます。今年10月洲本教会は教会創立120周年を迎えます。その長い歴史の中に礼拝堂にお写真が掲げられている方々をはじめとして、「天上の友」にしろされた方々がおられます。それらの方々の上に、神さまの平安を心よりお祈りいたします。

皆様、様々な思い出が、今よみがえって来られているのではないのでしょうか。集われましたお一人おひとりの上に神さまの慰めを心よりお祈りいたします。天上に召された方々、お一人おひとりが人生の喜び、悲しみ、神さまの慈愛、イエス様にある恵みを感じながら、与えられた人生を精一杯生きて行かれ、今は天井で憩うておられることを信じます。

先ほどお読みしました聖書の箇所はヨハネによる福音書3章16～17節は、神さまの愛を伝えているとても有名な個所で読む者に慰めと力を与えてくれる箇所です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が滅びないで永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」教会では、神の愛とかイエス・キリストの愛を良く聴きますが、わたしは、仏教の家に育って教会に通うようになって、神の愛とかイエス・キリストの愛と言われてもなかなか分かりませんでした。

以前に、お話ししたことがあるのですが、二十歳の頃、大阪に住んでいた時、洗礼を受け、教会学校の教師をして毎年教会学校で夏期キャンプに和歌山の海辺にある南部（みなべ）というところに行きました。そこで聞いた話が深く心に残り、愛と聞くと思い出す話があるのです。キャンプ中のある日の夜、その土地の老人牧師の方が「親子貝」という話をして下さいました。親子貝の母貝は自分の殻の中に子どもを産みます。そして、子どもは育って行くのですが、子どもが成長した時には母貝は自分の身体の栄養をすべて子ども与えつくして死んで行くということでした。何と厳しい、悲しい話だろうかと思ったのですが、わたしの母親も7人の子どもを育てるためにとても苦労していました。

私の母の姿を思い、「親子貝」の話をとおして、母の愛を深く思ったのでした。この「親子貝」の話を聞き、イエス・キリストが私たち一人ひとりのために十字架に死んでいかれた姿を思い、神さまの愛とイエスさまの愛が少し分かったように思います。

愛と言うのは、後になって気づかされることが多いのではないかと思います。天に召された方々とのことを思い出してもそのように思わされることがあるのではないのでしょうか。

自分で苦しんで誰も助けてくれないと思う時もあります。神様が私を捨てたと思ったりします。神様が私をもう愛していないと思う。裏切られたとさえ思う時もあります。しかし、その時こそ、祈ってくれる人がいて、主が支えてくださっているという事ではないかということなのです。

主イエス・キリストは私たち人間がこの世で受ける苦悩をすべて一人で引き受けられ、十字架に死んでいかれました。ここに愛があります。神の子自身が死の苦悩を引き受けていかれたことにより、このイエス・キリストの十字架の故に、わたしたち人間は死の不安と恐れから解放されるのです。それがキリスト教でいう「救い」なのです。

礼拝後、

曲田山の教会墓地、納骨堂に出向きます。

召された方々は幼い子どもをはじめとして年齢も様々ですが、思い出を大切に、心より主の慰めをお祈りします。今は憐み深い神の御手の中で永遠の命を得ておられることを信じます。

わたしたちは、永遠の命に至る希望があることを信じ、今天に召された方々のことを思い、思い出し、今も生きておられる神さまによって与えられた心の平安を感謝して、少しでも愛を分かち合ってこれからの人生を生きて行きたいと願います。

皆様の上に主の平安をお祈りいたします。 共に黙想いたしましょう。